

BOOK REVIEW

一発明解！ 腫瘍内科医が教える 見えるがん化学療法(ケモセラ)

著：菊池 由宣（東邦大学医学部臨床腫瘍学講座 准教授／東邦大学医療センター大森病院化学療法センター 部長）

昨今、がん薬物療法は飛躍的な進歩をとげ、さまざまな作用機序の抗がん薬が開発、上市されている。こうした現状の中、薬剤師は各々の薬剤の作用機序や特性を理解し、薬学的な観点から医師や看護師に適切な助言を行っていくことが求められる。

本書は、一般的な専門書だと非常に難解な腫瘍学を平易な文章とイラストでわかりやすく解説しており、これから腫瘍学、がん薬物療法を学ぶ者にとって必携の一冊といえる。

本書では初めに、総論としてがんの分子生物学の基礎的な知識（がん関連遺伝子や免疫）を解説している。細胞の分裂期にみられる染色体の両端（テロメア領域）は通常の細胞だと50回分裂すると短縮され、正常細胞は老化細胞と認識され分裂を終える。がん細胞の90%ではこのテロメアを伸長できるテロメラーゼという酵素を発現しており、がん細胞は永遠に分裂を繰り返し不死化してしまうことが知られている。細胞の不死化については著者が海外留学時に研究していた分野でもある。こうした基礎知識を踏まえたうえで、各薬剤の特性を理解することは極めて重要であり、がんの基礎研究を生かしながら臨床業務を行う著者の姿勢が反映されている本書の特色のひとつといえる。

抗がん薬、とりわけ分子標的薬は近年さまざまな薬理・作用機序を有するため、非常に複雑であり、全てをきちんと理解するのはとても難しい。各論では、各薬剤が作用機序ごとに分類され、最近上市された新規の作用機序薬剤であるHSP90阻害薬のピミテスビブまで網羅している。ここでは、各々の薬剤が作用するシグナル伝達経路や標的因子をカラーのイラストでわかりやすく図解されていて、薬理作用や作用点につ



B5判／277頁

定価 3,960 円（本体 3,600 円＋税 10%）

発行：南山堂（2022 年 10 月）

いて本書で一度に把握できるのがとてもありがたい。また、EPR 効果（腫瘍組織は血管透過性が亢進しているため、血中滞留性の高い高分子や微粒子が血管外に漏出しやすく、さらにがん組織ではリンパ組織が未成熟であるために漏出した物質はリンパ管を介して消失しにくい）を利用した内包リポソーム製剤の作用機序など総論で解説されていることを理解したうえで各論を読むと腑に落ちるような構成となっており、基礎と臨床応用を結び付ける薬学的な思考力が身につく内容となっている。

本書が、がんを専門とする医療スタッフ、とりわけがん専門薬剤師育成のための入門書となることを願ってやまない。

東邦大学医療センター大森病院薬剤部 副部長 松本 高広